

あの技術は今



編集にあたって

編集チームリーダー 田中良明

新年にあたって考えるのは将来のことが多いが、過去のことを考えるのもよい。もちろん、昔を懐かしむためだけではなく、温故知新、すなわち古きをたずねて新しきを知り、将来につなげるためである。昨年の特集は2030年の話であったので、今年の特集は過去の出番である。といっても、ただ過去のことを書くことが広範囲になるので、話題を絞ることにした。その話題とは意外性である。つまり、多くの読者の日ごろの認識を覆し、考えてみればなるほどと感心する話を集めた。

かつては中心的技术であったが、現在は新しい技術に取って代われ、もう使われていないと思われる技術がある。ところが、特別な用途では、新しい技術が使えず、かつての技術が依然として使われている例がある。「依然」というと聞こえが悪いが、その用途では「依然」ではなく「必然」である。更には、その用途の需要に応じて、かつての技術がどんどん進化していることもある。

かつての技術がよりはん用の技術に取って代われ、現在は余り使われていないことがある。しかし、かつての技術の方がその用途には適しており、一部の人は現在でもそれを使ってその恩恵にあずかっている例がある。もちろん、その利用者によって、その技術も進化し続けている。他の人もその技術を使って、高能率な仕事をすればよいのにと思う。はん用技術はいろいろなことに適用できるので、技術者にとっては楽である。しかし、それで能率を犠牲にしている。昔と比べると技術者が学ばねばならない技術は非常に増えているので、はん用技術

を使うことによって手間を少しでも減らしたい気持ちは分かるが、優れた技術は皆に使ってもらいたい。

ある技術は本当に歴史を閉じて、それを使った製品は博物館でしか見ることができなくなった。ところが、その技術で定められた規格が現在も使われ続けている、規格として生き残っている例もある。更に、規格としてさえ残っていないが、製品の設計思想として今でも引き継がれ、次から次へと開発される新しい製品全部に役立っていることもある。

ある製品は2010年に製造中止になるらしいと聞いて、この技術も長い歴史を閉じるようになったかと感慨にふける。ところがよく考えてみると、その技術を使った別の製品があり、世の中で山ほど使われている。更には、新しい製品もどんどん開発され、技術の進化も続いている。その技術が歴史を閉じることなどあり得ないことに気付く。

今回の特別小特集は、このような面白い内容であるが、編集チームが執筆者を探すのは結構大変であった。かつての技術を知っていて、かつ今日でも使われている、あるいは更に進化していることを詳細に説明できる方はそうはいない。相当高齢な方なら候補者はいるが、余りに恐れ多いので、現役で執筆できる方を探した。いろいろつてを頼ってようやく今回の執筆者の方々をお願いすることができた。

執筆者の方々には、執筆内容が今回の特別小特集のテーマに合致するように、いろいろと無理を聞いて頂いた。難しい注文を聞いて下さった執筆者の方々に、この場を借りてお礼申し上げたい。

特別小特集	田中 良明	石井 孝明	野中 尚道
編集チーム	安藤 淳	荒川 賢一	